

# 福岡市西区の草場古墳群採集の須恵器片

秋田 雄也

## 1. はじめに

福岡市西部に広がる早良平野は古代から脈々と人類の歴史が受け継がれ、国内外の人々の交流の拠点であった。現在の早良平野は古代の人々の歴史の積み重ねの上に成り立っている。地域に根付く博物館にとって地域史は非常に重要な研究課題である。古墳時代後期に当たる6世紀後半の代表的な古墳である福岡市西区所在の草場古墳群において、2014年に筆者が採集した須恵器片の資料紹介を行う。

## 2. 地理的概要と考古学的環境

草場古墳群(福岡市西区)は長垂山から伸びる丘陵の尾根線上や裾部に位置する後期群集墳であり、付近の金武・羽根戸・野方地域の西側丘陵部には古墳時代を通して古墳が多数分布している。また6世紀後半代から急速に増加する古墳時代後期の群集墳からは鉄滓を供献する例や、広石南古墳群A群のように鍛冶工具を副葬する例もあり、これらの古墳は製鉄工人との関連が窺われる(松村2010)。また、長垂



図1 草場古墳群とその周辺の遺跡 ※国土地理院地図を一部改変して作成

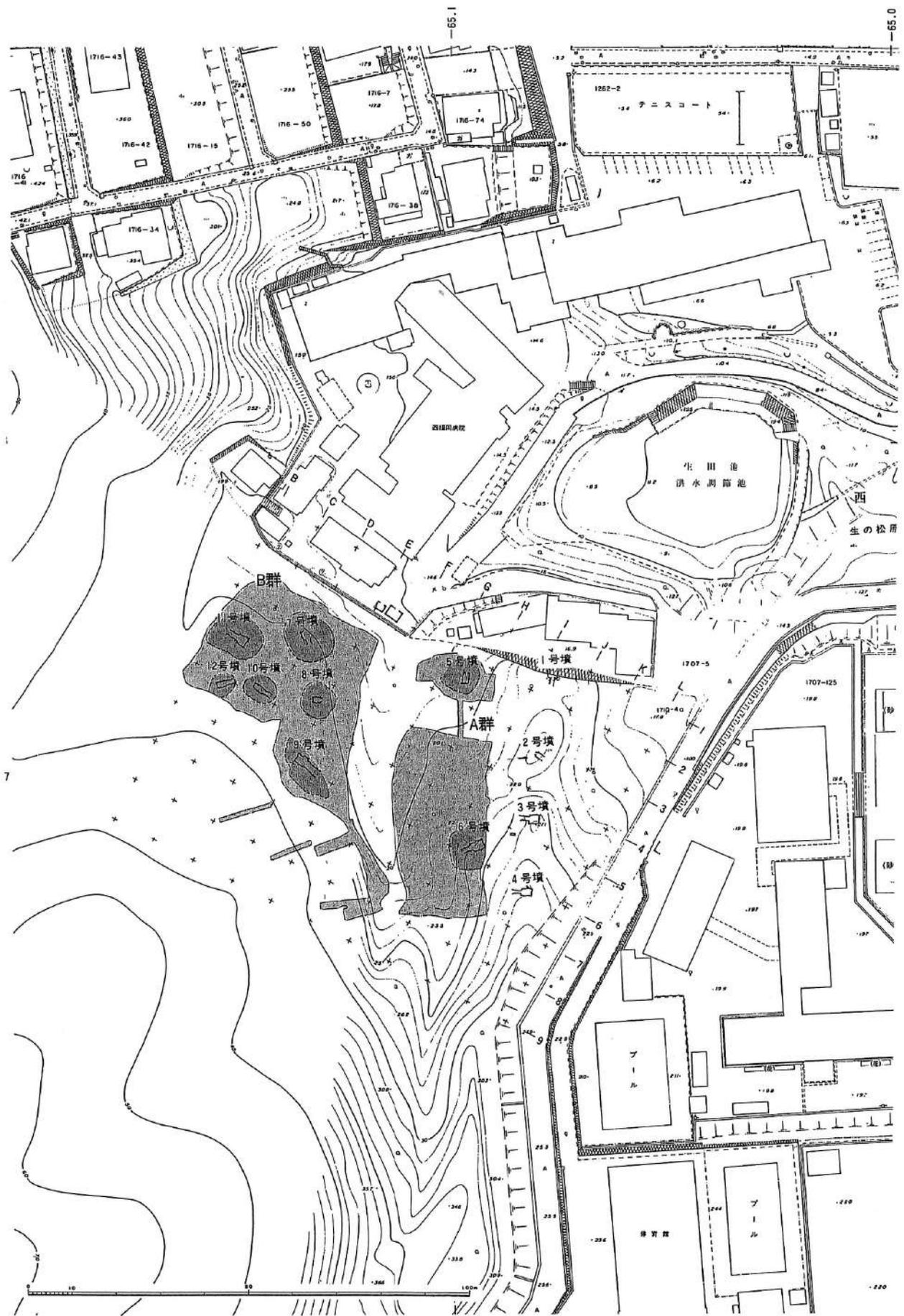


図2 草場古墳群分布状況 出典:(松村2010)

山を挟んだ西側の今宿地域には鋤崎古墳などの前方後円墳が集中している今宿古墳群がある。4世紀から6世紀後半を通して在地集団の系譜をたどる事のできる点で稀な事例である(辻田2013)。周辺には古墳時代の遺跡だけではなく、草場古墳群から南東約300mに斜ヶ浦瓦窯跡があり、「伊貴作瓦」・「警固」などが刻まれた文字瓦が見られ、鴻臚館に使用されたという(松村2010)。なお、近隣には、同時期の城ノ原廃寺も知られている。また海岸近くには弥生時

代から古代にかけての生の松原遺跡や下山門遺跡が存在する。中世には元寇防塁が築かれ、現在は生の松原海岸に復元整備されている。

### 3. 遺跡の概要

草場古墳群は12基からなる古墳群である。長垂山地方に延びる丘陵の尾根上に存在する後期群集墳である。東側をA群、西側をB群としており、主に6世



写真1 1号墳(右)、2号墳(左) 筆者撮影



写真2 3号墳 筆者撮影



写真3 4号墳 筆者撮影



写真4 4号墳石室 筆者撮影



写真5 3号墳石室入口 筆者撮影



写真6 須恵器散布状況 筆者撮影

紀後半から7世紀初頭にかけて構築されたとされている(松村2010)。これまで3次に渡る調査(加藤1992・松村2010)が実施されており、1～4号墳は近くの斜ヶ浦瓦窯跡とともに福岡市指定史跡として保存されている。5～12号墳は、現在住宅地となり消滅した。以下、西陵公園内に保存されている1～4号墳の概要を述べる。

1～4号墳は南から北へ延びる丘陵尾根にはほぼ等間隔に並ぶ。4号墳南側は削平され、1号墳墳丘北側は病院建設で切断されて垂直な崖面となっている。

1号墳は方墳で横穴式石室を持つ。A群中、5号墳と同じ最北端部の標高23m付近に位置している。調査以前の段階で墳丘は破壊されているため正確な規模は不明であるが第2次調査報告書(松村2010)によると東西16.7mであり、南北も同規模であるとされている。石室は南側に開口し、羨道部からは須恵器甕・壺・坏などがまとまって出土しており、墳丘祭祀が行われていたと推測できる。

2号墳は歪んだ長楕円形を程している。4つの古墳では一番小規模であり、現在では石室を構成していたと推測される石材の一部が土から顔を出しているだけである。これまで実施の2号墳の調査によると墳丘の全面調査は行っておらず、正確な状況が不明である。なお、遺物は石室内から4点の須恵器(坏身・坏蓋・小型壺・提瓶)が出土している。

3号墳と4号墳は現状では明瞭な区別が難しく、3号墳北側の墳丘裾部が半円状であることから双円墳の可能性も指摘されている(松村2010)。しかし3・4号墳ともに横穴式石室が検出されており、3号墳玄室からは須恵器のほかに刀子・鉄鏃・鉈・鉄斧・金環・水晶切子玉・ガラス小玉が出土している。羨道付近の墳丘からは内部に石が入った須恵器甕が1つ押しつぶされたような状態で出土している。これも1号墳と同様に墳丘祭祀である考えられている。

4号墳は墳形確認のための調査が行われたのみで出土遺物はない。石室は3号墳と同じく西に開口しており、墳丘頂部は削平されている。

## 4. 採集資料の特徴

草場古墳群において採集した須恵器片は全合計14点である。この内、小片を除く9点を図化した(図3)。なお、図3は断面実測図を挟んで拓本右が内面、左を外面としている。今回検討する須恵器片はいずれも甕の胴部破片である。1～9の全て外面は格子目叩きであり、中でも1～9の外面は格子目叩きの上にカキメが施されている。1～9の内面は全て青海波叩きが施されており、中でも1・5・6・8・9は青海波叩きの上に横ナデ調整が見られる。またこれらは胎土の特徴や色調から4個体を構成すると考えられる。図4-1を個体A、図4-2・3を個体B、図4-4を個体C、図4-5～9を個体Dとする。5～9は程度に差はあるものの、表面が風化している。

個体A：1は最大長8.5cm・最大幅7.7cmであり、非常に微量ではあるが微小な雲母とガラス質化した石英が胎土に含まれる。

個体B：2の最大長は8.2cm・最大幅は7.6cm、個体B：3の最大長は5.6cm・最大幅は8.2cmである。胎土には微小な雲母とガラス質化した石英が含まれているが雲母の量が個体Aと比べ多い。また、3は内面が焼成時の熱で変形している部分がある。なお、3は2号墳と3号墳に挟まれた場所で採集したものであるが、胎土や色調から個体B：2と同一個体とした。3号墳の墳丘から雨などの影響で流出したと推測される。

個体C：4は1と外面の色調に近いが個体Cの方が暗灰色をしている。4の最大長は4.7cm・最大幅は7.5cmであり、胎土に微小な雲母とガラス質化した石英が含まれており、雲母の量は個体Bとほぼ共通である。

個体D：5～9の胎土は他と同じように微小な雲母とガラス質化した石英を含むが、個体Dは雲母量が他の個体と比べると非常に多い。また、個体D全て外面焼成時に熱で変形した跡が確認出来る。5の最大長は5.9cm・最大幅は6.7cm、6の最大長は6.4cm・最大幅は7.8cm、7の最大長は5.5cm・最大幅は5.5cm、8の最大長は4.2cm・最大幅は7.7cm、9

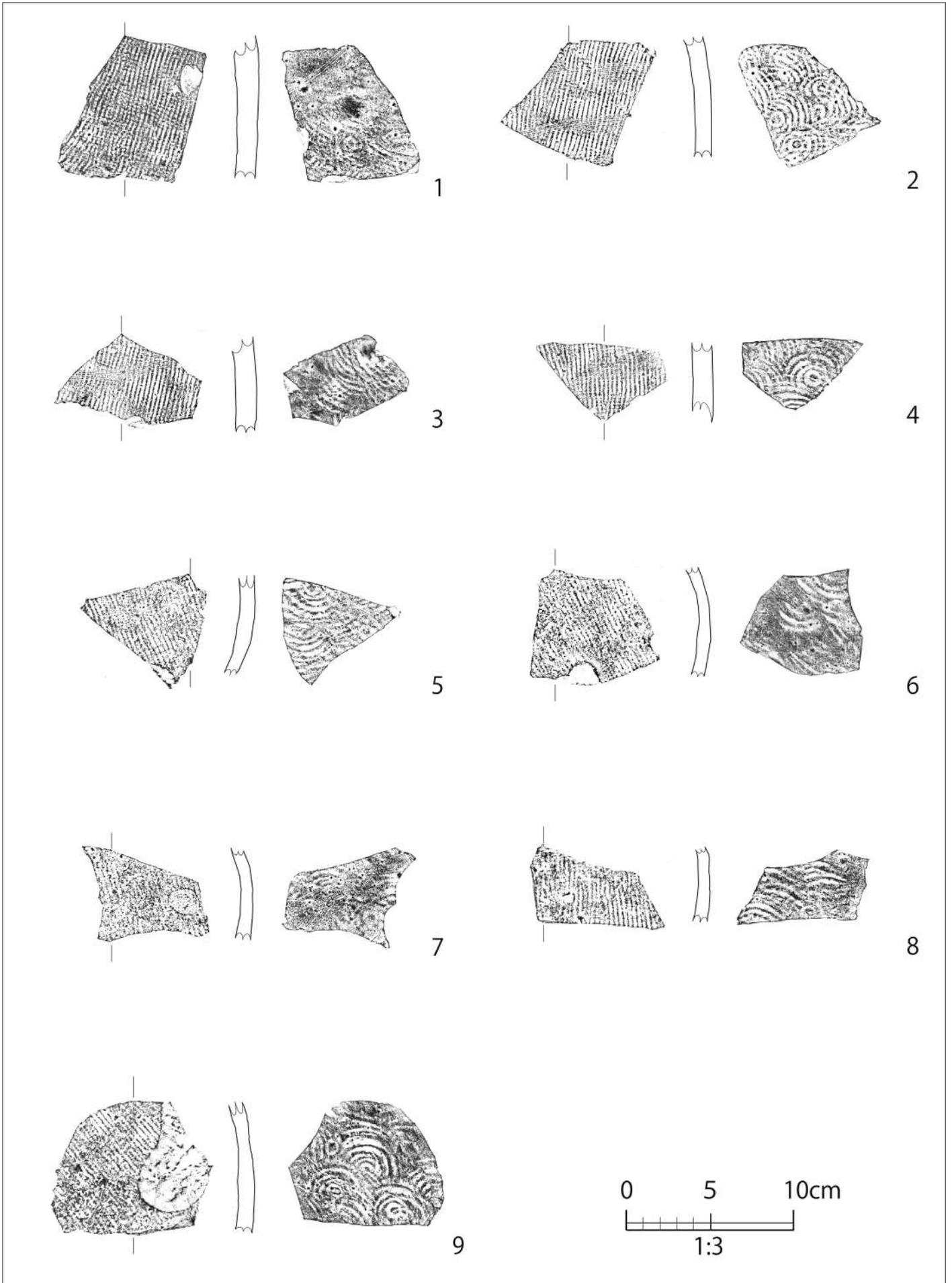


図3 採集須恵器拓本・断面実測図(1/3) ※1が個体A、2・3が個体B、4が個体C、5～9が個体Dである。

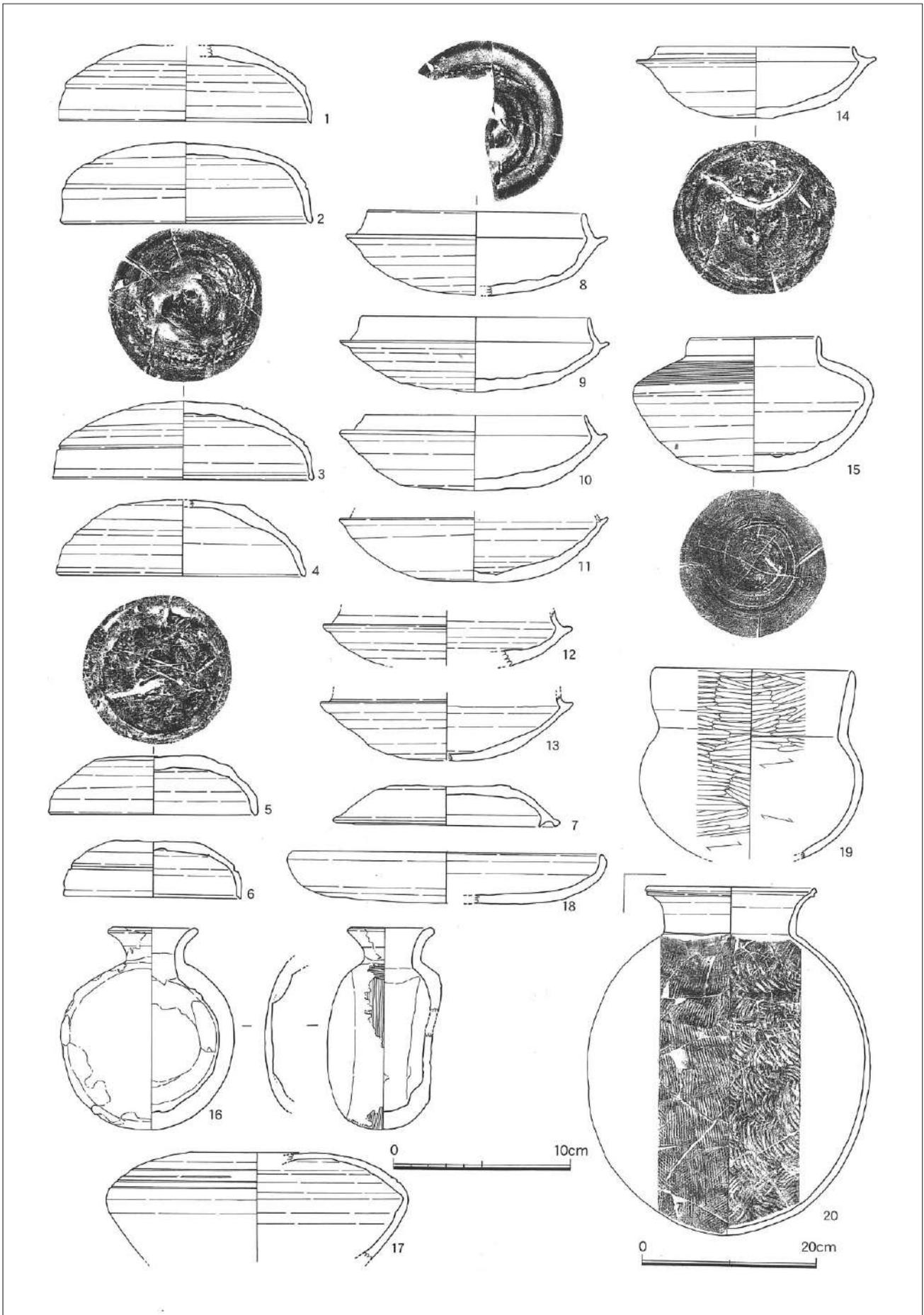


図4 草場古墳群3号墳出土須恵器 出典:(松村2010:25頁)

の最大長は7.9cm・最大幅は9.2cm、である。

## 5. 考察

今回図化した9点の須恵器甕胴部破片は焼成時に熱で変形したものが多く(特に個体D)、狭い範囲に複数個体の散布を確認した。第2次調査報告書(松村2010)によると、筆者が須恵器を採集した箇所から羨道を挟んで南側に隣接した場所から、墳丘祭祀に使用したと考えられる須恵器甕を1個体検出している。以上のことから今回採集した須恵器甕胴部破片は本来、墳丘祭祀に使用された可能性がある。今回の採集した須恵器は少なくとも4個体であるので、3号墳の墳丘祭祀に使用された須恵器甕は最低4個体以上の可能性がある。

第2次調査報告書(松村2010)によると3号墳出土の須恵器は牛頸窯跡群編年のⅢBを主体としている(図14、松村2010:25頁)。図4の甕20と今回採集した資料の特徴が外内面とも非常に類似している。今回採集した資料には口縁部が含まれていないため胴部からおおよその時期を推測するほかなく、出土状況が3号墳出土の須恵器甕(図4)と類似しており、おそらく同時期だと考えられる。他地域の資料報告においては、1970年刊行『野添・大浦窯跡群』(福岡県文化財報告書第43集)の編年を基礎にした牛頸窯跡群の須恵器編年を基準としている。そこで、これまでの編年研究を基礎に船山良一氏が総括的に牛頸窯跡群出土須恵器の編年を行った『牛頸窯跡群一統括報告書1—』(大野城市文化財報告書第77集)と元にとすると、第2次調査報告書(松村2010)3号墳出土のもの須恵器もⅢB期であると考えられる。そのため今回採集した須恵器甕胴部破片はⅢB期(6世紀後半)と推測される。

以上、今回採集した須恵器についてまとめると以下ようになる。

- (1) 全部で4個体が存在すると考えられる。
- (2) 燃成時の熱で変形したものが多く、決して良質といえないものが多数である。近隣の須恵器窯との関連性が考慮される。
- (3) 時期は牛頸窯跡群出土須恵器編年を基準とす

ると同窯跡群ⅢB期(6世紀後半)と考えられる。

- (4) 墳丘祭祀に伴う須恵器甕の可能性が考えられる。

## 6. おわりに

福岡市の油山山麓から西部地域にかけて多くの後期群集墳が存在する。これら6世紀後半から7世紀初頭における古墳群と近隣の須恵器窯跡や製鉄関連遺跡など、周辺の生産遺跡との関連性を探ることで、この時代の後の律令国家形成への道程を明らかにすることをこれからの研究課題としたい。

## 謝 辞

本報告において常に懇切に指導をしていただいた伊藤慎二先生(西南学院大学国際文化学部准教授)、また、本研究紀要への掲載をお許しいただいた宮崎克則館長(西南学院大学博物館館長兼国際文化学部教授)、内島美奈子先生(西南学院大学博物館学芸員兼国際文化学部助教授)を始めとする西南学院大学博物館のスタッフの方々や、石川蒼氏(國學院大学文学研究科博士課程前期史学専攻)、普段から非常にお世話になっています同期の坂本夏菜氏を始めとする多くの西南学院大学大学院生に多大なる尽力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

なお、今回報告した採集資料は、現在西南学院大学博物館が収蔵保管している。

## 参考文献

- 石木秀啓 2011 「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」、『古文化談叢』第66集、23-54頁、九州古文化研究会
- 小田富士雄・真野和夫編 1970 『野添・大浦窯跡群』、福岡県文化財報告書第43集、福岡県教育委員会
- 加藤良彦 1992 『草場古墳群—第3次調査報告—』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第301集、福岡市教育委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店
- 辻田淳一郎2013 「古墳時代」、『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』、144-147頁、福岡市史編纂室
- 中村浩 1981 『和泉陶器窯の研究』、柏書房
- 中村浩 1993 『古墳時代須恵器の編年的研究』、柏書房

船山良一編 2008 『牛頸窯跡群一統括報告書1』、大野城市文化財報告書第77集、大野城市教育委員会

松村道博 2010 『草場古墳群2—第2次調査報告—』、福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1104集、福岡市教育委員会

秋田 雄也(あきた ゆうや)

西南学院大学博物館学芸調査員